

連載 関係からみた子どもの こころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授, くじらホスピタル

不登校と自殺念慮を訴えた女兒

R子：初診時年齢10歳6カ月，小学校5年生。

主訴：学校に行きたいけど行けない。行こうとするとお腹が痛くなる。

家族背景：両親，兄，R子の4人家族。両親の祖父母はともに近くに住んでいる。父親は会社員，母親はパート勤務。母親同伴での受診である。

現病歴：元来おとなしく，気の優しい，まじめな子どもであった。自己主張をすることは少ないが，友達の話をよく聞くため，みんなから慕われていた。大柄で豊満な体型で，初潮は半年前に迎えるなど，身体面は早熟であった。

今回の不登校の契機となった事件があった。それは小学校4年生のとき，自宅で友達とパーティをするために，友達数名と一緒に帰宅しているときの出来事であった。中学生の男子が自転車で乗ってこちらに向かってくると，すれ違いざまに突然R子の胸を鷲掴みにし，一緒に歩いていた女友達の胸も触って逃げていった。R子たちが振り返ると，男子はにやっと笑っていた。気が動転したR子は自宅に着くと，母親に「いま，痴漢に遭った」と話した。母親は大変だったねとなくさめたが，R子は「びっくりして声も出なかった」と話す程度で，そのときはさほどの混乱を示さなかったため，パーティを開き，みんなと一緒に過ごした。しかし，数日が経つと，じわじわと恐怖が蘇ってきて不安になり，男の人に会うのも怖くなった。そして不安になると，母親に激しく当たり散らすようになった。「お母さんを殺して，私も死ぬ！」とまで言うようになり，手首自傷もはかった。不登校になり，当院受診となった。

初診時の状態

元来おとなしく，気の優しい子どもで，みんなからとてもいい子だといつも言われてきた。性格はまじめで，自己主張もあまりしない子どもだった。今回の事件があつてから，母親に「お母さんを殺して，私も死ぬ！」と言うほど，自分の苦しみを強く訴え

るようになったが，そう言ったかと思うとすぐに前言をひるがえして，母親にさかんに謝るといったことだった。どうしてよいかわからない不快な思いを，思いきり母親に表出できない，あるいは表出してもすぐにそれを撤回してしまうところに，R子の母親に対する複雑な思いを感じさせた。

身体面の早熟さとは対照的に，表情やしぐさ，物言いなど，すべてにわたって非常に幼い印象を受け，身体面と精神面のアンバ



ランスが顕著であった。

面接では、R子はこちらの質問に答えることができなかった。母親のそばから離れず、何か聞かれるとすぐに母親を見て、代わりに答えてくれるように促すしぐさを繰り返した。抗うつ薬と抗不安薬を少量処方し、週1回30分程度、母親同席で面接を行うことを提案したところ、素直に受け入れた。

関係発達支援の経過

●第2回(初診から4日後)

【R子の母親に対する反発と母親の困惑】

R子は登校できず、ずっと自宅で過ごしている。悪夢が数日続いたが、少しは軽減してきた。しかし、母親がR子に声をかけただけでイライラする反応は続いていた。例えば、ある日テーマパークに親子でかけた際、ベンチが1つ空いていたので、R子が座っていいかと母親に聞くと、「だめ」と言われたのでイライラし始めた。母親が「かっとなったらだめよ」となだめようとする、腹を立てて「帰る!」と言いだした。

今回の事件があってから、なぜか母親はR子に「正直に言わなければだめよ」とさかんに諭すようになった。心のなかにあるものをすべて吐きださないといけないのではないかとの思いから、そう諭してしまうというのである。母親はこの子がなぜ不登校になったのか、どうしても理解できないという。怠け病だとも思い、学校に行くようにプレッシャーをかけていた。娘が学校に行かないことで母親もひどくイライラしてしまい、兄に当たってしまうこともあった。その一方で、この子がこんなふうになったのも私のせいかとも思った。これまで厳しく育ててきたから、この子にはそれが重荷だったのではないか、これまで素直でとてもいい子だった、何も言わなくても自分でなんでもできていた、駄々をこねたり、物をせびることなどまったくなかった、と振り返るのだった。

このように、母親は事件後の娘とのやりとりについて率直に語るのであるが、面接を行うなかで、娘の気持ちがわからないだけでなく、冷静に対処できない自分に対しても困惑していることがしだいに浮かび上がってきた。母親が筆者とこのような話をしている間、R子はイライラするのか、椅子に座っていても身体を動かし続けて、椅子をせわしなく回転させていた。

【母親へのアンビバレントな思いと甘えの出現】

R子は、気持ちが落ち着いているときに、「いままでお母さんべったりだったから、1人離れて考えることも必要かなと思うし、入院したい。いまの生活を考えると、何も変わらないような気がするから」と、母親に自分の希望を話すようになった。しかし、そばに母親がいないと心細いのか、1対1で話を聞こうとしても、母親にしがみついて離れようとしなない。そしてすぐに「入院したい」と言った自分の希望を引っ込めるのだった。R子の母親に対するアンビバレントな思いが強いことがうかがわれた。R子のしぐさを見てみると、母親への甘えが明らかに強まっているのであるが、甘えに対する強いためらいもまた、同時にはたらいっていることがうかがわれた。

面接が終わった後、待合室のソファに母子2人並んで座っていたが、R子はまるで猫がじゃれつくように自分の頬に母親の手を持っていき、すべすべしてもらって、気持ちよさそうにしていた。不自然な甘え方ではあったが、R子は母親に甘えが表出できるようになった。

●第3～4回

【全面的に母親に依存する】

相変わらずイライラが高じては、薬を全部飲もうとしたり、母親の言い方が気に入らないとすぐに食ってかかり、「うるさいな!」「もう死んでやる!」とまで言うが、その一方で、風呂に入るときも、着替えるときも、歯を磨くときも、すべて母親の介助が必要で、自分からはまったく何もやろうとしなくなった。入浴中は母親に全身を洗ってもらうほどだという。このように、母親への激しい反発を示す一方で、身の世話は全面的に母親に頼るようになっていく。ここに、母親に対する反発と甘えが両極端なかたちで同居しているというアンビバレンスが非常に強まっていることが見てとれた。

入院して親から離れたかったかと思うと、すぐにいやだと言うなど、何につけても自分の気持ちが定まらない状態である。こうしたR子の様子を、母親は少しずつ冷静に受け止められるようになり、「これまでとてもいい子で、なんでも簡単に受け入れてきたのだから」と話すまでになった。筆者も母親には、「これまで、母親を困らせることはほとんどなかったのでしょうか、このように母親を困らせることも大切でしょう」と助言した。

面接で母親と話をしながらR子の様子をうかがっていると、自分でもよくわかっているようで、最近の行動は意図的な節がある。

なぜなら筆者が時折R子に向かって、“あなたはどう思うの”と視線を送ると、R子にはにやにやと笑みを浮かべて、いかにも甘えた表情を見せる。そんなところに、どこかわざとらしい甘えを感じさせる。また、母親が「(回復するまでに)あと半年くらいはかかるでしょうか」と筆者に尋ねているのを、R子にはにやにやしながら聞いている。筆者はそうしたR子の様子に気づいていたので、少し冗談めいた口調で、「そんなにかからないよね」と、R子に同意を求めるとしながら母親に答えておいた。

●第5回(1カ月半後)

「学校に行ってみたい気もする」とは言いだしたが、やはり心細い気持ちが強く、いつも母親のそばにいたがる。時折、一人でめそめそ泣いていることもあるという。面接場面でも、全体的にまだ子どもっぽさが目立つ。うじうじした態度で、いかにも甘えたい気持ちが強いと感じさせる。しかし、睡眠と食欲は良好になってきた。

母親に、R子の乳幼児期の様子を詳しく聞いたところ、つぎのような深刻な話が明らかになった。

【母親がR子の周産期と乳幼児期を想起する】

母親はR子を妊娠中、内分泌器官に悪性腫瘍が発見されたため、出産後まもなく手術をしたが、転移を認めたため、リンパ節切除術と放射線療法を受けた。そのため出産後も1カ月間ほど入院した。その後も療養生活が続いたので、R子の養育は近所に住む両家の祖母が主に担っていた。R子はおとなしい子だったので手がかからなかったが、R子の兄のほうかいろいろと反応したので、みんなの目がつい兄のほうにいきがちであった。その後もR子は母親に素直に甘えることがなく、母親と直接手をつなぐこともなかった。手をつなぐときには、タオルを介して双方が握り合っていたという。R子は相変わらずおとなしい子どもだったが、なぜか母親は、何かにつけていつも「我慢なさい」と繰り返し、論じていたというのである。

この話を聞いて、筆者はR子が乳幼児期、母親に甘えることができない状況に置かれていたことを知るとともに、今回の事件直後に、母親が娘に「なんでも話さない」と論じていたことと昔のかかわりとはあまりにも異なっていて、まるで正反対の接し方であることに強い違和感を抱いた。母親はR子の思いに沿って対応することができず、自分自身の不安から娘に対応していたのではなにかと推測された。しかし、そのことは、ここでは直接取り上

げることは避けた。

【母親の気持ちも不安定になってきた】

そうした過去を思い出すようになって、母親は急に悲しくなるかと思うと、カーッとなくなってしまい、気分がキレそうになるなど、自分でもコントロールできないほど情動が不安定になってきた。このままでいいのかなど不安になることもあるという。母親は息子(兄)に対しては素直な気持ちでいられるのに、なぜか娘(R子)に対してはそうした気持ちがもてず、関係もしっくりこない、率直に自分の気持ちを述べる。しだいに母親はR子を育ててきたこれまでの経過を想起しながら、当時の親子関係を振り返るようになった。

●第7回(2カ月後)

面接で会ったときの印象では、R子は少ししっかりとしてきた印象を受けるが、家ではまだイライラしやすく、遺尿や遺糞も認められるという。いまだ回復途上である。

【R子は母親の言動に過敏で批判的になる】

R子は母親の話のトーンに非常に敏感になっている。面接中の母親の言い方に反応して、「いまのお母さんの言うことは、本当はそうじゃないんですよ!」「本当は怒っているんですよ!」などと、母親の気持ちを鋭く見抜いて聞き直す。どう対応してよいか、母親の困惑はますます強まっていった。

●第8回

【夕方の外出でフラッシュバックが起きる】

この日は珍しく夕方の受診であったが、父親の運転でR子は病院の入り口までは来たが、どうしても車から降りることができず、「怖い、怖い、(車から)出たくない!」と叫びだした。さらには「この時間怖い、この時間怖い!」「変質者のような人にまた会ったらいやだから、行きたくない」と激しく訴えるようになった。このときのR子の反応を見て、母親は初めて、事件が下校時であったことに気づいた。そういえば、夕方の散歩にも行きたがらなかった。映画も午前中にしか行きたがらなかったと、母親はようやくその理由に気づいたという。このように母親は、娘の気持ちにすぐにはピンとこないところがある。こんなところに、母と娘の関係がしっくりとこないことの一端がうかがわれた。

【母親の娘に対する強いアンビバレンス】

娘が父親を頼っているのを見ると、どこかでほっとしている自分がある。そんな自分を振り返り、本当に私はこの子を愛しているんだろうかとも思っていた。これまで娘が自分を必要としていたときに、ひょっとしたら自分はそれを打ち消したり、自分のほうから娘を引き離していたかもしれないと内省するまでになった。

母親は娘の気持ちがしっかりと掴めないもどかしさや、心細さが強まっていたが、夫にこのことを話すと、お前の育て方が悪いからだと言われそうで、何も言えないという。母親にとっては息子だけが頼りの状態になっている。

そこで筆者は、今回のフラッシュバックの出現に対して、娘が「怖い！」という自己表現は、母親への甘えの気持ちから出たものであることを説明したうえで、母親に助けを求めるこのような反応は、肯定的に受け止めてよいことを助言した。なぜなら、母親に甘えをまったく出せない状況にあれば、「怖い！」とはとても言えるものではないからである。ようやくそれが出てきたことは改善の徴候と考えられたからである。

今回の事件のショックは親子にとって小さくないが、母親と娘の心理的距離を縮める契機となったことも確かだ、そのことを肯定的に受けとめる気持ちが、母親に生まれてきた。

●第9回(3カ月後)

面接の朝、自宅の前で交通事故があった。子どもが救出されていて、その子が「お母さん、助けて！」と叫んでいた。それを見て母親が泣いていると、R子が駆け寄ってきて「どうしたの」と理由を尋ねた。母親が理由を説明すると、R子は「私もそんなときには、「お母さん、助けて」と言うよ」と話してくれた。それを聞いて母親は、うれしくなって涙を流したという。娘に対する母親のわだかまりが少しとけてきた様子であった。

●第10回

1カ月ほど前から、午前中には登校できるようになっていたが、久しぶりに夕方から登校すると、そのままスクールカウンセラーに会いに行った。痴漢に遭った通学路は通らなかったという。

R子が夕方になって「お母さんは私と話をしてくれなかった。お兄さんとばかり話していた」と、素直に昔の自分の気持ちを母親に話すようになった。

また、面接でも母親とよく話すようになってきた。筆者のほうにはまったく顔を向けないで、ことさら母親のほうばかり向いて

いる。母親と直接話したい気持ちが強まっていることがうかがえた。

●第11～12回(4カ月後)

【父親との関係に対する恥じらいが生まれる】

2回目の両親同伴の来院。R子は、診察室に両親一緒に入ろうと最初は勧めていながら、いざ入る段になると、すぐに父親を追いだした。母親によれば「恥ずかしらしい」とのことだったが、このように母親との関係が深まっていくにつれ、少しずつ父親との関係に違和感を抱くようになったのであろう、恥ずかしいという気持ちが起こってきていることがわかる。それまでR子は母親との関係とは対照的に、父親べったりの関係が続いていた。それはほかの家族からみても、あまりの溺愛ぶりであったという。ようやくR子にも父親に対するアンビバレントな気持ちが強まってきたことがうかがわれた。

【筆者とも向き合えるようになる】

これまでずっとR子は母親のほうしか向かず、筆者のほうを向いて話すことはなかったが、この日初めて筆者が質問したときだけは、こちらに身体を向けて話せるようになった。話し方にも甘えた調子がなくなって、よりしっかりとしてきた印象を受けた。

その後、数カ月間、徐々にR子は自分の気持ちを母親に直接話すことができるようになり、母子関係は順調な変化を遂げていった。学校にも通い、カウンセラーと定期的に会うようになるなど、極めて順調な経過をたどっていた。

●第19(8カ月後)～23回(11カ月後、小学6年生)

この日のR子を一目見て、ずいぶんとしっかりしてきた印象を受けたので、1対1での面接を提案したところ、すぐに同意した。治療開始後初めての1対1での面接であった。これまで母親に何か尋ねられても「大丈夫」とだけしか言えなかったが、このころには「(あのときは)お母さんに何も言えなかったんだよ」「悩み事があっても友達やお父さんに話していた」「こういうことがいやだったの」と素直に話すようになった。自分でもずいぶんよくなってきたと思うと語っている。学校については、「まだ怖い。みんなが待っていることを思うと、(学校に)行きたいという気持ちもあるが、後押ししてもらおうと、逆に行きたくなくなると」と、いまの気持ちを率直に語っている。

通学路を変えて、毎日母親と一緒に登校するようになった(た

だし、カウンセラーと担任に顔を合わせて帰るだけである)。

【トラウマ体験を初めて母親に語り始めた】

再登校するようになって、2週間ほど経過したところである。母親と登校していたとき、以前歩いていた通学路に「ちょっと来てみて」と言いながら母親の手を引っ張って連れていき、痴漢に遭遇したときの様子を具体的に細かく話し始めたというのである。それを聞いて母親は、「よく話してくれたね」としっかり抱きしめた。すると母親に「ちゃんと学校に報告してね。ほかの子が(痴漢に)やられるとかわいそうだから」と、思いやりのある言葉も付け加えたという。

ただ驚いたことに、このようにR子がみるみるしっかりとしてくると、今度は母親のほうが、娘が自分から離れていってしまうようで急に心細くなり、不安が強まり、過呼吸を起こすようになった。そしてついには救急車で運ばれるほどの騒ぎになった。「見捨てられ不安」が母親に強まってきたのであろう。そのための不安発作の出現である。実は独身時代から、不安発作を起こしていたことがわかってきた。

以後、治療は母親中心へと変わっていった。

これまでの経過を振り返って

PTSD (Post-Traumatic Stress Disorder, 心的外傷後ストレス障害)の回復のためには、トラウマ体験を自ら想起することがいつかは必要となるが、それが可能になるにはそれなりの条件が必要であることを、本事例の回復過程は教えてくれる。トラウマによる強い不安や恐怖を誰かに受け止めてもらうことが必要となるが、それを受け止める側にも、それなりの条件が求められるということである。

本事例の母子関係においては、乳幼児期に、母親の病氣療養のため、甘えをほとんど体験できなかったことが明らかになったが、そのみならず、母親自身も幼児期に寂しい思いをしてきたのではないかと想像されるのである。その根拠として、独身時代に不安発作で苦しんだということもさることながら、娘がトラウマから回復して、依存から自立へと移行していく段階に差しかかったとたん、今度は母親のほうが見捨てられ不安を起こしているからである。母子ともに親との関係で「甘え」の体験を享受できていなかったことは確かであろう。そのような歴史が母子関係に気持ちのズレを生み、互いの気持ちがしっくりこない状況が続いていたのだらうと思われる。その意味では今回の出来事が「災い転じて福となす」ことにつながっていけば幸いだと、心から願わずにはいられない。